

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1655号 2002年10月07日(月)

《 Shanghai Speed 》

さて、一年ぶりの中国特集です。9月の21日に行き24日に帰ってきました。昨年と違って、今回の中国訪問で行った都市は上海のみ。しかし、船の中で過ごした時間が長く、都市は一日ごとに移動した去年と違って、激しく変貌する上海という都市をかなりしっかりと見ることが出来ました。先週も書いたように、成長戦略が描けないG7諸国にとって、台頭しつつある国・中国は将来のいつかの時点で真剣に取り組まなければならない相手だ。しかしそれを待つまでもなく、実を言えば中国経済は既に深く先進国経済に組み込まれている。

最新統計によれば、中国には国営を含めて「企業」と呼べるものが1000万社あるとされている。そのうち外資系企業は38万社。全体のわずか3.8%に過ぎない。しかしこの中国全企業の3.8%に過ぎない外資系企業が、中国全体の工業生産の27%、中国の輸入の47%、中国の輸出の53%をまかなっているというのである。

ということは、我々が手にする、目にする製品が「中国製」と書いてあっても、実は中身は外国企業が生産から輸出までをリードしたものかもしれない、いやその可能性が高いということだ。つまり、我々が想像している以上に中国の経済は世界経済に既に組み込まれていることを示している。

今回のレポートのキーワードは以下の通りです。やや順不同です。

- 「上海スピード、さらには浦東スピード」
- 「描かれた遠大な計画 情報都市へ」
- 「発展段階の中間省略」
- 「最新のものを逡巡なく」
- 「国際化」
- 「世界に先行する実験都市」
- 「人材育成」
- 「疾走する街、歓迎する市民」

今の上海を象徴するのは、なんと言っても「上海スピード」、または「浦東スピード」という言葉である。IT(情報技術)の世界には「ドッグイヤー」という言葉がある。犬は人間

より7倍の速さで生き、寿命を終えると言われるところから情報通信産業で使われてきた。

「上海スピード」とは、正式には1600万人、不法滞在者を入れると2000万人に達する人口を抱える中国最大の都市の、すさまじい変化の速さを表す。それは、「住んでいる人間でも、変化についていくのが大変」(上海の日本人)という言葉に象徴される。その上海でも成長著しい浦東地区(上海の旧市街から見て黄浦江の反対側)の変化速度を表す言葉が「浦東(プートン)スピード」だ。プートンはもともとはのんびりした農村地帯。変化は上海の旧市街よりよほど速いから、別の言葉が生まれた。

上海の街を歩くと、林立する大きなビルの谷間の古い取り壊しの対象となっている地区の壁に、「爆破告示」というポスターが張ってあるのに時々出くわす。日本で言う「取り壊し」を、「爆破」から始めるのだ。何月何日何時に一次爆破、二次爆破はいつと書いてある。まるで鉱山開発のように進む上海市の旧市街の取り壊し。そしてそこに出来る新しいビルやマンション。喜々として新しいマンションに移る住民達。

なぜたった4~5年で東京の2倍とも言われる超高層ビルが素早く建ったのか。ビルを見る間での林立は、「上海スピード」「浦東スピード」の象徴だ。それは、東京やニューヨークを見慣れた私のような人間をも圧倒する。

短時間でのビル林立の理由は、第一に規制が緩やかなこと。東京では夜の一定時間、例えば午後7時になるとビルの建設工事は止めなければならない。上海にはそんな規則はない。爆破で整地された後に、24時間の突貫作業でビルが建つ。一日何時間でも働く労働者はいくらでも居る。日本には労働基準法の縛りがある。

第二に、地震がない。通訳をしてくれた陸さん(半世紀は生きている)は、「子供の頃一度あった」と言っていた。彼女は日本に来たときに何が恐ろしかったかと言って、「地震だった」と語った。耐震構造にしなくて良い分だけ、ビルは安くできる。

第三に、開発を推進するのは市で、土地は市か国のもの。つまり、安価にビルを建てられる。第四は、たとえそこに何千人の人が住んでいようが、収容にかかる時間は実に短いという点だ。森ビルの六本木開発にかかった時間の長さは語り草だが、上海の浦東地区では今のハイアットが立っている地区は3500人もの人が住む地域だったが、たった2年ほどで立ち退きを完了している。

上海は上にだけ伸びているのではない。あとで記述するが、今の上海を二つに割る黄浦江(長江の支流)の下に世界でも珍しいダブルデッキ(一本のトンネルを上下二層にして、ともに車を通す)のトンネルを2本掘っているが、ヤオハンの近くの工事現場で工期を見て仰天した。「2002年4月~2002年12月」となっていた。とんでもない「上海」「浦東」スピードだ。

《 and it is intended 》

重要なのは、そのスピードが「意図されたもの」だという点だ。先に市の関与を少し書いたが、上海の大発展の背景にあるのは遠大な都市計画である。

日本の百科辞書で「上海」を調べると、

「中国の揚子江河口近くにある都市。南京条約で開港した古い貿易港で、第二次世界大戦前は英・米・日の共同租界とフランス租界が設けられ、国際色豊かな半植民地都市であったが、革命後大工業都市に変わった。¹」(マイクロソフト・小学館のブックシェルフから)

浦東新区 近未来の開発イメージ図

Pudong New Area after completion of development in near future



(掲げたのは森ビルが「10年後の浦東」として想像図にまとめたもの。メール版やワードのバージョン違いで読めない方は、<http://www.ycaster.com/diary/index.html> で見れます)

などとある。つまり上海は「大工業都市」だと。日本の企業も少し前までは上海に盛んに工場進出した。事実、浦東の森ビル(名称はHSBCビル)の最上階から下を眺めると、直ぐ下には造船所が見える。上海が工業都市だった残しようだ。しかし、上海市当局は少なくとも市街地からは二次産業を排除して、上海を「巨大な情報都市」に変貌させようとし

¹Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) © Shogakukan 1988/国語大辞典(新装版)©小学館 1988

ていた。「上海 = 工業都市」はもう古い。上海は消費と情報の街になりつつあるのだ。

市当局はこうした市街地の近くに残る第二次産業の部分（各種工場、造船所など）を、浦東地区の市街地からははるかに遠いところにすべて移転させる計画を立てている。

これに関連して言うと、上海を中心に中国に進出していく日本企業の顔ぶれにも大きな変化を及ぼしているようだ。日本企業の中国進出でコンサルタントをしている人たちは、「今年の春から日本企業の中国進出の形態が変わってきた。それまでの工場進出から、販売拠点、設計拠点、ソフト制作会社、さらには研究開発拠点の設立という形での案件が増加している」と証言している。「消費市場としての中国」重視、消費地に合わせた研究開発、製品開発の流れが、進出企業の間でも定着しつつあるということだ。

上海の情報都市化の武器は何か。それは、IT と英語だろう。一年前に上海のホテルに宿泊したときには、私は電話線でやっとネットに繋がった。それも、28.8k の遅い回線だった。しかし今年行ったら驚いた。ホテル全体に ADSL か光（どちらか確認できなかったが、恐ろしく速かった）のネットワークシステムが組まれていて、各部屋にはその端子が使用時間制の料金表とともに机の上に出ていた。

その端子を私の PC に直接入れ込んで（カードも要らない）、立ち上げ画面の支払いに関する一点承諾で、直ちにネットにつながった。上海でも一部のホテルだけかもしれないが、既に上海は「電話番号依存のネットワーク接続」の時代を通り抜けようとしてつつある。東京の一部ホテルもそうだが、宿泊したホテルの IT 担当者の知識が、日本の一流ホテル IT 担当のそれを明らかに上回っていた。スターバックスに居た通信技術者という若いインド人が言う。「上海は凄く変わってきているでしょ」と。

英語への注力も凄まじい。ほぼ完成しているリニアモーターカーの駅舎を取材していた時だ。我々を中学生中心のグループが逆取材しにきた。聞けば学校新聞の編集者達だという。何語で話しかけてきたかと思ったら、英語だった。それが実にうまかった。日本の中学生は、喋りであれだけの英語を操れないだろう。つい最近まで私の息子は中学生だったから、日本の普通の中学生の英語力はよく知っているつもりだ。

聞けば、上海の子供達全員は7歳で英語を学び始め、14歳では毎日2時間以上の英語授業があるそうだ。聞いていると、喋りにかなり重点を置いた教育のようだ。今の上海の街では英語はほとんど通じない。しかし10年後に彼等が生産人口になった時は、中国語を喋らない日本人は、少ない中国語の通訳ではなく、英語の通訳を連れて行けば上海で用を足せるかもしれない、と本気で思った。英語も数学も勉強時間を削っているどこかの国は、この先どうなってしまうのだろう。

人材の育成に熱心なら、技術の取り入れにも熱心だ。それも、どん欲なまでに。それは来年には実際に走り出すリニアモーターカーや公共交通機関全体に使われている乗降車の為の IC カードに見ることが出来る。

リニアは日本とドイツが開発にしのぎを削っていた技術だ。決して **made in China** ではない。しかし上海はそんなことにはかまわない。最初日本に打診があったが、日本はそれを断ったという噂を聞いたが、それではとドイツの技術に目を向けた。そして上海は「世界で最初のリニア実用線」を浦東空港と上海市街を結ぶ43キロに作ってしまった。駅舎はほぼ完成し、走路（電車で言えば線路）も繋がった。

公共交通機関用の非接触型 IC チップ・カードにも言える。起きているのは、「発展段階の中間省略」だ。上海の地下鉄には日本のパスネットに相当するカードがまだ使われていた。しかしこのカードは日本のカードと違って矢印のある一定の方向に入れなければ使えない。遅れている。

しかし上海はそこから一気に、すべての交通機関に使える汎用の IT チップ・カード「上海公共交通カード」に進んだ。私は地下鉄の駅で一枚買ったが、聞けばバス、地上の電車、タクシー、船などなど何にでも使えるのだそうだ。日本のスイカと同じように一枚のカードでお金を足していけば何回でも使える。この点では既に日本を凌駕している。日本で地下鉄と JR を乗りこなそうと思ったら、スイカとパスネットの二枚のカードが必要だ。

中国では電話は地上電話が普及する前に携帯電話が普及したと言われる。携帯の方が設備投資が安く済むからだ。そして今や中国は、世界一の携帯保有者数（1億5000万台近く）を誇る。ステップがなくて、ホップ・ジャンプとくるから、変化が速い。ビルの建設も「国際入札」が主だ。恐らく世界最先端の技術が上海のビルの建設には使われている。

《 welcoming the changes 》

人々はこれをどう思っているのだろうか。日本なら直ぐに、「開発優先の破壊」「都市の景観が損なわれる」と批判が出てくる。日本人の一員である私も、何回もこの質問を上海の人にぶつけてみた。しかし実に見事に彼の答えは、「今がいい」「これでいい」と一致していた。超高層マンションの下の汚い共同キッチン、共同シャワーに住む一家の主婦は、「隣にあんなのが出来てしゃくに障らないのか」と聞いたら、「いやここも開発が着手されれば、私たちももっと広い、一人一部屋の家に住めるから」と開発を待ち望んでいた。

自ら「中の上」という上海交通大学（ここは江沢民が出たところとして有名）のある助教授は135平米もある立派なマンション（1000万で買ったと言っていた）のソファに座りながら、「あと300万円残っている借金を払ったら、上海の郊外に別荘が持ちたい。その次は二台目の車」と、平然と言っていた。娘さんの部屋も見せて貰ったが、ちょうどお嬢さんが英語の勉強中で、ノートにはずらっと英単語が並んでいた。助教授に「一人娘に何を望むか」と聞いたら、返事は「国際人」だった。

朝の公園で女性主体のパラパラ（日本のそれが変形して取り入れられていた）踊りを見ている数人の老人（男性）にも聞いたが、「上海はこれでいい。良くなっている」と。古いモノが壊されていくことへの郷愁は何もなかった。言わされているのだろうか。いや、とてもそうは思えない。

その理由は、森ビルの竹内総経理と話をしている解けた。彼は言う。「日本人が懐かしがる上海は、租界地のあった上海ですよ」と。これではっと気が付いた。日本人が歌や歴史で思い浮かべる上海とは、日本が英米仏などと「租界」を持って中国人を尻目に優雅で自由な生活をしていたころだ。

中国人はその外国人の租界の自由な暮らしを、「壁の穴から羨ましく見るだけ」(同)だった。アヘン戦争(1840年~1842年)での敗北という屈辱を背負いながら。先進国による上海の植民地支配は第二次世界大戦まで続いた。彼等には「古き良き上海」などという思い出はない。大部分の上海人にとって、それは貧困と屈辱だった。だとしたら、突き進むしかないだろう。

一体今の上海は、日本の発展段階から見ればどの程度の都市、市民生活なのだろうか。いつ頃の東京と同じだろうか。これは難しい問いで、正確な回答は無理だ。上海は先に紹介したようにある意味では東京の先を行き、ある意味では凄く遅れている。行けば直ぐ分かるが、日本の表参道かと思間違えるほどのブランド・ショップ街があると思えば、戦後直後の闇市のような街もある。とてつもなく格差が激しい。

しかし、総じて言えば「80年代前半の日本の大都市と同じ生活レベル」との見方が強い。大部分の専門家がそう言う。物価に対する勤労者一人当たりの平均的な所得から見てである。まあそんなものかもしれない。

しかし、これは専門家も認めているし筆者もそう思うのだが、例えば上位一割の市民の所得は相当高いのではないか。ある人が言っていた。年収が2000万円を超える所帯の数は、中国の方が日本に比べて遙かに多い、と。中国は共働きが多い。多いというより、それが原則である。そういう背景があるからだろう、「夕食は亭主が作る」という家庭が圧倒的だった。また公式統計には出てこないが、中国人のかなりの部分は第二、時には第三の職を持つとされる。男女とも。つまり、公式統計以上に中国人の所得は多いのである。それが上海の旺盛な消費の背景となる。

上海に進出している日本の企業は口を揃えて、「最新のものを、時を置かずして提供しなければダメだ」と言う。それが中国でモノを売る、ビルを建てる基本の姿勢だと。つまり、「中国向けだからこの程度で良いだろう」という姿勢では、上海にしる主要な中国の市場では競争できない、というのである。情報はネットで直ちに伝わる。日本で最新式のモノが出たら、もう上海の人は買わない。「最新のものを逡巡なく」というキーワードはここから来る。豊かさでも中国は日本に接近しているのだから、製品やサービスに対する要求レベルも同じだろう。

疾走する上海だが、まだ「ストック」というと東京に遠く及ばない。高層ビルの数では東京の2倍あることは間違いないようだ。まず、上海では「高層ビル」の中に高層マンションも含まれる。日本の場合は、「高層ビル」と言ったらオフィス棟を指す。だから、上海は見た目よりもオフィスは少ないということになる。

それもあって、「実際にオフィスとして使える床面積を比較してみると、上海は東京の七分の一」と森ビルの関係者は言う。つまり、専門家の感覚から言えば、上海は「やっと使えるオフィス・ビルが出来てきた」ということだろう。古いビルは IT が張り巡らされるオフィスには使えないということだ。ということは、上海はもっと高層ビルが建つということだ。文中に入れた写真のようになる。

昨年も書いたが、文化の集積、ノウハウの集積もこれからだろう。見てみると、例えば 1960 年代の 10 年も続いた文化大革命時に失われたものが多いのではないかと、と思わせる。カクテルの作り方、料理の手法。ただし確実に戻ってきたものはある。それは、「笑顔」だ。これは先週書いた。別に日本の資本のレストランだけの現象ではない。中国のレストラン関係者にとっても、「いかに笑顔でお客を迎えるか」が大きなサバイバルのポイントになってきている。

最後にまとめとして言えることは、「上海は中国にとっても、世界にとっても希有な実験都市」になっている、ということだろう。どこに向かって走っているかは分かっている。空港と市の中心部をリニアモーターカーのシャトルで結び、英語が通じる「国際的な情報都市」だ。多分、かなりいい線までいこう。しかし、その先を予想するのは難しい。体制の問題もある。貧富の格差がどう収斂するかも分からない。しかし、何から何まで飲み込みながら、この大都会は当分突進を続けるだろう。

中国で急発展している都市は上海だけに限らない。一昨年行った大連は、自ら「北方香港」（北の香港）を目指して突進していた。なにせ地下道から何から、「北方香港を目指す」と書いてあるのだから徹底している。数こそすくないが、高層ビルもかなり出来ていた。半年で変わる中国の都市のことだから、2 年もたった今はきっと大きく変貌していることだろう。すさまじい勢いで都市化が進む中国。

オニール財務長官に言われるまでもなく、将来のそう遠くない時点で日本が「世界第二位の経済大国」の地位を中国に譲る日が来るだろう。何せ人口が違う。中国は国民一人当たり GDP が日本の十分の一でも、総額としての GDP で日本を凌駕できる。そうなっても、日本は依然として中国より遙かに豊かな国だ。

しかし規模は世界経済に対する発言力を大きく左右する。今から「日本より経済規模の大きい国 = 中国」との付き合い方を考えて置いた方が良く、というのが帰国の飛行機の中で考えたことだ。

今週の主な予定は以下の通りです。

10月7日(月)

8月景気先行指数

米8月消費者信用残高

10月8日(火)

9月卸売物価

8月機械受注

10月9日(水)	20年国債入札 英中銀金融政策委員会
10月10日(木)	9月マネーサプライ 日銀金融政策決定会合(～11日) 米8月卸売在庫 米8月シカゴ連銀指数 ECB理事会
10月11日(金)	米9月小売売上高 米10月ミシガン大学消費者センチメント指数

《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。土日と諏訪に帰っていましたが、日中は暖かくても、夜は相当に冷える。油断すると風邪を引きそうでした。山の上ではなく、里でも一部ではもう紅葉が始まっている。これから電車に乗ると、中央線沿線の山の色を見るのが楽しみになります。

中国といえば、最初に北京に行った10数年前を思い出します。天安門広場を目の前にして、「これはでかい国だ」と思った。「他の国の誰かに言われたからと言って、この国は容易には動かない」と。その中国が、上海などの都市を中心に疾走を始めている、というのが印象です。統計を見ていたら、中国はもうすぐ4億人が都市に住む国になる。

「上海は料理はどうでした」とよく聞かれる。行ったレストランがあまり良くなかったのか、思ったほどではなかった。上海に行っても、慎重にレストラン選びをしなければおいしいものにはぶち当たらないでしょう。むろん、高いお金を払えばおいしいモノはあるのですが、私が好きなのはそこそこの値段でおいしいものです。まあ私の場合、「四川が好き」という事情はありますが。だから私には、重慶や成都の方においしいものがあるような気がする。なお、10年後のプートの想像図を <http://www.ycaster.com/diary/index.html> に掲げておきました。ご興味のある方はどうぞ。

それでは、皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤(03-5410-7657 E-mail ycaster@gol.com)が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》